

武蔵野日曜聖書講筵 聖霊降臨節祈禱会

「旺なる哉聖霊の力」

――ローマ書第8章――

1985年5月26日

小池辰雄

聖書を読むことが直ちに祈禱会 生命の御霊の法 霊肉渾然として救われる キリストの霊を宿している根源現実 キリストのお宿 そこに本ものが来ているか (参考)「キリストと私」

【ローマ書8章】

1 この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。2 キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。……9 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん、キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。……11 若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて、汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。……31 然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。……39 高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

【エペソ書2章】

20 汝らは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト・イエス自らその隅の首石たり。21 おのおのの建造物、かれに在りて建て合わせられ、いや増しに聖なる宮、主のうち成るなり。22 汝等もキリストに在りて共に建てられ、御霊によりて神の御住となるなり。

●聖書を読むことが直ちに祈禱会

朝からただ今まで御言、御霊の顕然たる御導きのもとにやって参りました。祈禱会に残れない方は誠に残念だと思えます。なんのかの言つてね、集会をズレる人はルカ伝の18章みたいになる。キリストに招かれていて、いろんな理由を言つて、拒んだら、

「^{まがき}離の外からそこらの人を連れて来い。聖国の子らは嘆き齒^{はが}噛みすることあらん」

と、キリストの烈しい譬話です。先ほどのご感話にもありましたように、これを第一にす



れば、福音第一にすれば、その他のことは一切成就していくんです。第一にしないと、非常にうまく行っているようだが、どこかで引っくり返る。これは霊法の世界です。どうぞ、そういう生き方をしてください。

ローマ書の8章を今読んでいただきました。なにもこれからこれの解説をするわけではない。短い時間で祈祷会をしますから。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。」

と、非常なはつきりした言葉ですね。エン・クリストの人間は罪には定められないと。「エン・クリスト」「キリストの中に」ということは、十字架を経なければ、エン・クリストにはなれないんです。十字架を経ているということは、完全に贖われているという現実だから。そういう現実にある者はもはや罪に定められない。完全に天国的に勝利させられている。相対的な

「自分がどうだこうだ」

と、そんなことではない。人間はすぐ相対的なものを見て、比較してみたり、なんのかのと思ひ煩う。

「内村鑑三」なんてのは、あれはわるい名前なんです、「日に三度鑑^{かんがみ}る」なんて。内村先生はあとで自分の名前をわるいと思ったでしょう。これはお父さんが漢学者だから、「鑑三」なんて付けたんだけれども。三度仰讀した方がいい。三度キリストを仰いだ方が。仰三なんだ(笑)。内村仰三。内村交三、キリストと交わった方がいい。こんなことを言う人は他にいないけれども。

「仰ぐ」ことはよく言われた。内村先生は、

「十字架を仰ぐ、十字架を仰ぐ」

と言っていた。私は丸の内の講演で先生の話を聞いてよく知っています。こっちの方「キリストと交わる」は言わない。ただ内村先生の『一日一生』の5月31日のところは素晴らしいことを言っている。ただし、あれはもうほとんど——ほとんどではない、あるいは全くと言ってもいい——あそこにもやっぱり聖霊のことは出てこない。本当にキリストと一如になる世界のところまでは、内村先生ははつきり言っていない。私は内村先生の文章の中でそこが一番好きなんだ。まあいつまでたっても、無教会は「内村鑑三、内村鑑三」とやっているわ。いくら内村鑑三といっても、パウロとは次元が違うんだから。このキリストの直弟子たちとは。

私は『一日千年』（後に第十巻『聖書は大ドラマである』に変更）というのを毎日書いている。第12巻か。365日読めるように、ヒルティの『眠られぬ夜のために』みたなやつを。東西古今の名言を載せて、それに私らしい解説を——解説ではないな、結局、告白だけでも——ところが、東西古今のいろんな名言を、あの本この本から捜し出してくるでしょ。けれども、まあそれはそれであるひとつの意味はあるけれども、結局、聖書の言葉にかなわな



いんだな。本当に質的にはつきりちがうです、どんな偉い言葉でも。やはり聖書の言葉は神の言葉だと本当に思う。結局、聖書のことが多くなってしまう。しまいには聖書の言葉ばかりになってしまいかも知れない。それくらい聖書の神の言葉は聖霊の言葉ですから。いわゆる思想家の言葉はかなわないです、どんなに気がきいたことを言っている。それを上げて解説する時は、今度は聖書がその中に入ってきて、引っくり返すようなことを言うんだ、私は。どうもしようがないです、そういうことになる。

「それではこの言葉ではまだ足りませんよ」

というようなことになってしまふ。だから、むしろそういう言葉をまたある程度あげて、いかに聖書が凄いかということをも証明することも出来る、逆にね。「註・著作集の当時の刊行予定は、第九巻『紀行と感想』、第十巻『旧約聖書抜粹』、第十一巻『新約聖書抜粹』、第十二巻『一日千年』であったが、その後、第十、十二巻はひとつにまとめられて、第十巻『聖書は大ドラマである』(1988年刊、最終巻)に変更された」

だから、もう聖書は、聖書を読むことが――祈禱会なんかなくなつていいんだよ――聖書を読むことが直ちに祈禱会なんです。身読しんどくすることが直ちに。

だから、さつき司会者がローマ書8章を30分位かかって読んでくれれば、それでお終いになつたんだ(笑)。

「もうこれで祈禱会は終わりました」

と、最高の祈禱会になる。ちよつと読むのが速すぎた。それくらいにして聖書は読んでください。その補助手段として――正直、私は無駄なものを書いてませんから――『エン・クリスト』でも著作集でも、時々、私の恋文だと思つて読んでくださいよ。ラブレターは書かないから。増田さんが感激して、8号や9号のことを言われましたが、本当にそうなんです。自分で読んでいて、ラインを引きたくなるんだから。それは神さまからきている示しの言葉だからね。

「これは誰が書いたんだ?」

なんてなこと。

●生命の御霊の法

2 キリスト・イエスに在る生命いのちの御霊みたまの法は、なんじを罪と死との法のりより解放ときはなしたればなり。

と。この8章2節というのは――私は頭がわるいけれども――こういうのは覚えているよね、8章2節のような言葉は。

「キリスト・イエスに在るところの生命いのちの御霊みたまの法のり」

という。聖霊は生命の霊でありまして、その法則は活ける法則なんです。その法の中にのつかつてしまうと、これが本当の自由なんです。霊法の世界に乗るといふと、キリスト



の霊法の世界に乗るといふと、これが本当の自由、自由無碍むげの世界、天衣無縫てんいむふう的な世界です。大自然が素晴らしいが、キリストの法の中にもったその人の霊的自然性というものはもつと凄あさまい。

仏教の方では、もういい加減な仏教ばかりで、

「原始のアゴン経に帰らなくてはいかん」

というようにことをさつき言っていたが。そのように今度は、キリスト教の方も本当に使徒たちの——これは聖書という本ものがあるからいいけれども——この本ものをどれだけ掴つかんでいるかということになると、これはいい加減な掴み方が非常に多いわけだ。だから、

「福音の原始かえに還れ」

という言葉が最初にスローガンに載つけて、手島さんと関根君と私で講演したんだ。あの時のあのスローガンは私が書いたんです、

「福音の原始かえに還れ。無教会何者ぞ」

というわけで講演したんですよ。

さっきのキリスト新聞のあれ「キリストと私」にも書いたでしょ。

「私の『無の神学』や『無者キリスト』は棄てられた石のようになっていっている。この石は今度は別な形で叫ぶぞ」

という。それがこの大詩篇です——これから書こうとする——12年間かかりますけれども、必ず書きます。「註・遺稿詩集『霊界の星々』1998年刊のこと」

そういう、まあ聖霊が溢れてくると、筆がもどかしいくらいになる。もう詩の形なんかそつちのけだから。あとから少し形は直すけれどもね。

この「生命の御霊の法」は、我々の罪とか死とか陰府よみとかサタン、この四位一体の悪の世界にキリストは私たちをして打ち勝たせてくださる。弱きに徹すると本当に強くなる。

「われ弱き時に強ければなり」

とパウロが言った。

● 霊肉渾然として救われる

それでここに、「霊」だの「肉」だのと書いてある。この「肉」というのはいわゆる肉情的な肉ではない。自己本位を「肉」という。どんなにそれが立派そうであっても肉なんです。自己中心、エゴイズムのことを「肉」という。「霊」というのは神・キリスト中心、これを「霊」という。どんなにつまらない事をしていても、その事が神・キリスト中心は「霊」という。これが一番はつきりした——パウロの書簡の中にはいろんなその使い方がありますがこれども——一番根源的な霊と肉の違いはそこにある。ギリシア的な考えのように、

「魂は肉体しっくの桎梏しじくの中にある」

という、そんな考えではない。霊肉渾然こんぜんとしていっている世界ですから、いわゆる肉は。我々の



魂とこれ〔肉体〕は霊肉渾然として救われる。だから、霊肉渾然として自己本位なのは、これが全体として肉であるし、霊肉渾然として神本位、キリスト本位なものを霊という。いわゆる「精神的」なんてものではない。

それで読むというと、そのところがはつきりする。我々が賜っている思想でも感情でも意志でも、全部これは賜りたるものです。それが自己中心になっているから、全部おかしくなっているわけだ。これが神中心ならば——何も禁欲でも何でもなし——全部それは神の栄光を躪すんです。いわゆる断食してどうのこうのなんてことではない。もし、断食したいならば、断食してキリストを喰らわなければダメなんです。いわゆる肉情を断食によって殺していくということではない。断食するなら、断食してキリストを食らいキリストを飲むこと。我々の肉体も大事な肉体なんです、霊体に化してるんです、霊体に。残念ながら、そのまま霊体に化しませんけれども、内側から霊体が与えられていく。霊核というやつだ、霊の核が。そういう受け方をする。だから、「信仰」なんていう言葉が躪いて困るんだよな。「信じ仰ぐ」なんて言ってるね、

「キリストは贖罪ということをしてくれた。永遠の生命はキリストにある」

とか、事柄ばかり、命題ばかり信じたってどうにもならん、そんなものは。「信仰」なんていう言葉はダメです。これは「体受」と言った方がいい、体で受けると言った方が。

「全存在でキリストを受けなさい。いわゆる信仰ではありませんよ」と、はつきり言うよ、僕は。

「全存在でキリストを受けなさい、体受しなさい。からだで受けとれ。あるいは、体をキリストの中にぶちこめ、聖書の現実の中に自分をぶち込め。ドラマの中に自分を入れる。読んでいるのではない。聖書の中に躍り込め」

と、そういう気魄で読んでくださいよ、本当に。私はウソを言っているのではないんだから。私はそういったことになったから。そこらの「聖書入門」なんていくら読んだってダメなんです。ジャーナリズムは私を受けとらないから、仕方がない。私が書いたって、そんなものは発行してくれないから仕方がない。だから、自分であれ〔自費出版〕するよりか仕様がなない。限られた人しか読みはしない。しかし、今にそれが爆発する時が来るから。

●キリストの霊を宿している根源現実

9 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、

「給わば」ではない。給うているがゆえに、

汝らは肉に居らで霊に居らん、

「霊に居らん」ではない。

「霊に居る」

ともつと断定的に、パウロ以上に断定的に読んでください。また、



「……であろう」

なんて口語訳なんか読んでいたら気がぬけてしまう。一人称・現在・単数、現在形でもって、あるいは現在完了形で読まなくては。そういう乱暴な訳の聖書を書こうかと思うくらいだ、本当にしようがないな。それが本当の根源現実です。私は「根源現実」というのが大好きなんです。

「相対的な現実ではありませんよ」

と。根源の現実はどうなにも波が打つても絶対にその波にさらわれない現実なんです。…（異言）…

然れど神の御霊なんじらの中に宿り給うているが故に、汝らは肉に居らで霊に居る。キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

と。もうパウロははつきり言ってくれたね。

「キリストの霊を宿していなければ、キリストに属してはいないんだ。大体100人のクリスチャンのうち97、98人が落第だ」

と言うんだ、パウロは。あなた方はその及第生になつてくれなくては。

「まだ私は落第でも及第でもありません」

と、中間がだいたい居るかも知れないけれども。私は46歳「1950年11月」でやっとこの聖霊の世界に入ったが、君たちはまだ20代——まだ20にならないのもいるかもしれないけれども——それが20代で聖霊の世界に入つてごらん。凄いことになるから。今にまぶしくて見えなくなる。80位になつたら、私の年齢位になつたら、

「あれは居るんだか居ないんだか分からない」

なんて、それくらい光つてください。光輪が射したりしてね。私のある友人が——私が日暮里を歩いていたら突然でつくわしたら——

「小池さん、あんたの回りが光っていたよ」

と。びっくりしたよ、そんなことを言われたから。

「キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず」

と。どうして、こういうことを一般のキリスト教会や無教会はいい加減に読んでいるんでしょうね。ここにきたら、パウロにこんなことを言われたら、もうそこで平伏してこの言葉の中に自分を投げ入れなければダメです。

「分かるの分からないの、そうか？」

「なんていうような世界ではない。福音書でもそうですよ。聖書なんてそうたくさん読めやしないんだ、本当は。そのかわり本当にそこを読んで、その文字が化体したら、体に化したら、あとはもう楽に読めてしまう。だから、山上の大告白の第二言、

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

と、きつき私は読んでしょ、



「幸いなるかな、汝はわが十字架によって、霊が無私の如く、私無く、貧しくされ
た者。天国即ち聖霊の我、汝の中に在り」

と。私は本当に平伏したです。ガラテヤ書2章20節と同じだ。誰もそんな読み方をしないよ、あそこを。どこかに註解書にそういうのがあったら見せてください。

今度のキリスト新聞に書いたこの「キリストと私」は、本当に読んだ人は、これは驚くはずなんです。

「やつぱり小池というやつはちよつと違うな」

と、それくらいに思っているのがいるよ、きつと。いいよ、どんなに思われたって。

●キリストのお宿

ちよつとエペソ書を開こうかな。エペソ、ピリピ、コロサイというこの三つは素晴らし
いところです。エペソ書2章20節。ちよつとガラテヤ書2章20節と同じだ。

「²⁰汝らは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト・イエ
ス自らその隅の首石たり。」

キリストは棄てられたんです。けれども、これが隅の首石。この

「棄てられた石が隅の首石になった」

と方々に引用してある。キリスト自身も引用された。

²¹おのおのの建造物、かれに在りて建て合わせられ、いや増しに聖なる宮、
主のうちに成るなり。²²汝等もキリストに在りて共に建てられ、御霊により
て神の御住となるなり。」(エペソ2・20〜22)

我々が神の住まいだ、一人びとりが。これは神のお宿だよ。神の出店だ。神のお宿、キ
リストの宿。キリストのお宿だから、みんな愛だからね、

「ああどうぞ」

と。

「リンゴが一つしかないけれども、二つ半分に割って食べましょう」

と、そういう世界だよ。

「足りないからダメだよ」

なんてそうじゃないよ、いくつに割ったっていい。分けて食べると、一つで食べたよりか
もつとおいしい。それが愛の世界です。あとでお寿司がくるけれども、お寿司が足りなく
なったら、私が分けてやるからね(笑)。そういう世界です。

「足りないからもう一つ注文しよう」

と、そうじゃないよ。そうでしょ。

そういう、キリストは隅の首石で、預言者と使徒たちが私たちの柱になっている。我々
は窓にされたり、いろんなことにされている。



それで、ローマ書8章。始めのところは11節まででしたね。

11若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて、汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。

「キリスト・イエスを死人の中より甦らせ給いし者は、汝らの中に宿り給う御霊によりて、汝らの死ぬべき体をも活かす。霊肉渾然として永遠の生命、死んでも死なないことにしてくださいました」

と。我々は、だから、既に不死鳥みたいなものだ。死なざる、相対的な生死を超越している世界です、永遠の生命とは。「永遠の生命」なんてただ思ったってダメですよ。御霊が即ち永遠の生命を持っているんだから。生命の御霊なんだから。

8章の後ろの方に来て、

31然れば此等の事につきて何をか言わん、

いろんなことを言ってきました、万物の復興まで祈っているんだけど、

神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。

「神我らの味方であるがゆえに、誰か我らに敵せん」と。「もし……ならば」ではない。

「神さまが私の味方であるから、誰か我らに敵せんや。キリストが味方だから、もう天下無敵だ」

と。インビンシブルだと。「無敵」といったって、敵なんか正直ないですよ。有っても、全部敵を荷なってしまうから。包んでしまうから。敵を敵とも思わなくなるから。それは凄いや、御霊の世界は。

「どう思われてもお気の毒さま」

というわけだ、相手が。恩を仇で返すのでなく、仇を恩で返す。

「旺^{さかん}なる哉、聖霊の力」

というのはそのことです。その智慧も、その生命力も、その愛の力も。だから、私は「旺なる哉聖霊の力」と今日は題した。聖霊の力ほど旺なものはどこにもない。聖霊は何ものとも換えられない。そんなことは無教会は、何十年といえども、はつきり言わなかった、あの内村鑑三、藤井武、塚本虎二という一流の先生たちが。私は知っているんだから、一流の先生についたから。皆さんは、「無教会」と言われても、分からないから困るけれども、私はそういう歴史を通じてきたからね。教会の人もやっぱり本当に、いい加減な教会に対しては同じことを言うでしょう。

●そこに本ものが来ているか

教会とか無教会とか、どうだっかっていいんだよ。要するに、カトリックであろうと何であ



ろうと、プロテスタントであろうと、

「そこに本ものが来ているか、キリストの聖霊が来ているか、十字架が本当に体受されているか」

それだけなんです。ええ。あとは礼拝の仕方がどうであろうと、信仰箇条がどうであろうと、ご勝手さま。人間はみなそれぞれ特殊的存在だから、みんなそれぞれの在り方でいいんです。イデオロギーの世界だつてそうだよ。政治の世界だつていろんなイデオロギーがあるよ。それぞれの真理性がある。ところが、それを絶対視して相手に押しつけようとするからおかしなことになる。それぞれちゃんとイデオロギーを認めていく。しかし、これが本当に握手するには、イデオロギーの世界では握手できないんです、もう一つ上の世界へ入らないと。本当の人間の世界に入らないと。レーガンとゴルバチョフが本当に人間の世界に入つて握手して、

「もう核戦争はよそう」

と、そうしたら、世界は大喝采だね。それだけの政治家がいらないんだ、一人も。何とか会議だ、サミットだと、下らないことをゴタゴタゴタゴタやって、少し制限するようなことを言つて、そしてあとはまた別なことを、その先の兵器を考えている。そして、経済的に大変なものを背負つてしまう。バカみたいなんだね、人間というのは。これはみんなサタンにあやつられている。さつき書いたでしょ。

「サタンにあやつられている20世紀の破滅への道はあぶない、あぶない」

と。全く世の中は狂つてきたね、本当に。まあやつぱり今までの歴史で一番狂つていようね、それから行き詰まりに向かつていようね。それはノストラダムスではないけれども、1999年なんていうのは案外バカにならない年だ。私の詩が出来上がる年だ(笑)。世界が引っくり返る前に出しておかないとね。出したつてこれどうにもならないね。地面の中に100m位の所に埋めておかないと。まあ半分冗談ですけどね。事柄は冗談だが、その危機的な現実は何談ではない。

それだから、パウロがもうこれはしようがないと。

³⁹ 高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

「このキリストの愛からいかなるものが離れしめられるか」

と、徹底的に言っている。このローマ書8章の終わりの方はもう絶叫ですよ、パウロのええ、絶叫しているよ。

「天上天下あらゆるものをもつて来ても、どんなものが来ても、このキリスト

の愛から、聖霊の愛から、神さまの愛から離せられない」

と。愛は最強であるという。人間はそれほど愛に飢えている。愛がなければどうにもならないように出来ている。本当の生命は愛の生命ですから。本当の光は愛の光ですから。太



陽がそうだなものな、自然界では。生命付ける光だものな、太陽の光は。ゲートはそういう意味で太陽を非常に尊んだ。

短い文章だけれども、今度書いたヒルティ、ダンテ、ルッター、ゲート、ベートーヴェン、キリスト。第九巻の『随筆集』（後に『感想と紀行』に変更）の中には入れますけれども、しかし、パンフレットで何かの形で出した方がいいかとも思っています。「註…1985年5月4日〜26日の間、毎週キリスト新聞に寄稿したもの。著作集第九巻『感想と紀行』／第一章、告白と論説に収録」あと祈りましょう。もう短く祈ります。キリストが「かく祈れ……」というのは短いものな、あの「主の祈り」というのは。短く直ちにその世界に入る。言葉がなくなつて、全部沈黙の祈りでもいい。これから沈黙の祈禱会をしようか。「それでおしまい」なんて言つて。え？ それもいいよ。

ペンテコステ記念日

「キリストと私

—— 絶対恩恵の無即無限無量 ——

1985年5月26日

小池辰雄

まず合掌してから筆を執つた。こういう標題があるかと人は問うにちがいない。ところがあるのだと主が応えてくださる。

すぎこし過越の祭の前、最後の晚餐を迎えるに当たり、イエスは弟子どもの足を洗い給い、ペテロの番がきた。すると彼はイエスに洗足されては勿体ないと思つて、

「断じていつまでもわが足を洗い給わざれ」

と言つた。これに対してイエスは

「我れもし汝を洗わずば、汝われに関わりなし」（ヨハネ13・8）

と返答された。即ちキリストの洗足にはペテロの存亡に関わる重大な意味があつた。

「キリストと私」という関係は、洗足関係であつて、キリストの方から本願の行為を以て



関係づけ給うた絶対恩恵関係であるので、「主が応えてくださる」と書いたわけである。

しからば、キリストの私への恩恵の迫りはどのようにして来たか。紙面に限りがあるから簡単にその由来を記そう。第一は舎兄政美の信仰生活と北京における客死とこれを迎えに行つた母の黄海船上での失明である。第二は預言者内村鑑三先生の著書と集会である。第三は詩人藤井武先生の自宅集会とその著書である。そして両先生の1930年の召天である。第四は聖書学者塚本虎二先生のイエス伝講義とその著書である。第五の決定的なキリストの迫りは、大阿蘇垂玉温泉瀧見荘において霊的人物手島郁郎氏と共に開いた聖書講筵に際して、直接天界から臨んだ聖霊のバプテスマであつた。

パウロの

「我れキリストと偕ともに十字架せられたり。我れ最早もはや生くるに非ず、キリストわ

が内に生き給うなり」(ガラテヤ2・20)

が私の根源現実となつた。1950年晩秋のことである。

私の「無教会時代」に、十字架の信仰はたしかに築かれていた。しかしそれらはまだ觀念の域を脱しきれてはいなかつた。祈りがまだ心の域のもので、全身的なものでなかつた。ところが、全身的にキリストの中に祈り入る棄身の祈りに聖霊が臨み、靈撃されて始めて、

「キリストがわが内に」

というパウロの告白が本ものとなつた。キリストの聖霊が、聖霊なるキリストが、「わが内に」なのである。パウロがさんざん

「我れキリストの中に」

「キリストわが中に」

といっている内住の事態が私自身の内的靈的現実となり告白となつた。

たしかに信仰の次元がちがつてきた。聖書のヴェールがとれた。使徒的信仰の現実が身について来た。使徒行伝的な質の不思議なことになって来た。医者がふしぎに思うことが起きて来た。行きつまっている魂、重病的な人々を今までにどれほど、キリストは私如き者を通して助け給うたか。ただ聖名を讃たたえるばかりである。

さてイエス自身、

「自分は何も出来ない」

「私が教えているのではない」

「なぜ私のことを善いと言うか、神の外ほかに善きものはない」

等と言って、イエスは自身を何ものともせず、ただ父なる神を一切とし、自分の意思を棄て、ただ父の意思を求めた。即ちイエスは神の前に無者であつた。すると神の無限無量の内容が彼の中に入って来た。実に

「父わが内に」

「我れ父の内に」



の一体一如の現実がキリスト・イエスの信仰の現実であったから（ヨハネ第17章）、

「我と父とは一つなり」（ヨハネ10・30）

と告白した。

「恵福なる哉、霊の貧しき者、天国はその人の有なり」（マタイ5・3）

とはイエス自身の告白である。

「霊が貧しい」

とは上述の如く自分を何ものともしない無的実存のことである。「天国」即ち神の臨在がその人の有とは、イエス自身が天国体であるという告白である。

それでは私はどうしたらよいのか。するとこの第一言はこう響いて来た。

「恵まれたる哉、汝、わが十字架により霊の貧しくされた者よ、天国即ち天国体な

る聖霊の我れ汝の中にあり」

と。かくて私は畳の上に平伏した、異言がほとばしった。山上の第一言はガラテヤ書2・20と同じことであるのを知った。自我という罪が根源的に贖われた無私という根源現実なる「無」は禅宗的な悟りの無ではない。絶対恩恵の無の現実である。そこに聖霊が臨まざるを得ない。

かくて十字架と聖霊は不可離の関係にある。キリストは十字架の贖罪を果たしてしかるのち聖霊を臨ましめた。十字架は私に無的実存を与え、聖霊は私に無限無量の質を賜う。即ち無即無限無量なるキリストは十字架・聖霊によって不滅の関わりを私に賜っている。

そういう絶対恩恵の焦点たる十字架・聖霊は、いかなる人を通してでも、その人らしきあり方を以てキリストの栄光を現じ給う。指紋が異なる如く、一人一人は天下一品なのである。万人はこの無即無量の恩恵の力によって、大調和の文化文明の百花を咲かせ万果を結ばせ得るのに、この二十世紀末はサタンの力にあやつられて何たる世界破滅への危機的現実であるか。

キリスト教界は、一般に申して、十字架・聖霊の使徒的信仰の現実に戻帰しなければ、キリストは天にて歎異し給う。拙著『無者キリスト』及び『無の神学』において私はこのことを叫んでいるが、「棄てられたる石」の如くされている。いつかこの石は別な形で、ダシテの如く、ゲデーの如く全世界に叫び且つ謳うだろう。

（「キリスト新聞」寄稿）

